

## 『琉球訳』における琉球地名の対音解読

著者	丁 鋒
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	21
ページ	56-84
発行年	1997-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/11919">http://hdl.handle.net/10114/11919</a>

# 『琉球記』における琉球地名の対音解読

丁 鋒

凡例：

## 一、本文の主旨について

『琉球記』の「訳地第五」、「訳山第十一」に漢字音記された琉球地名の発音を解読する。琉球地名資料を引用し、十八世紀の北京音と現代四川羅江方言を取り入れ、琉球音と合わせ、中琉対音を再建する。

## 二、『琉球記』について

『琉球記』は1800年来琉した中国の冊封使李鼎元が楊文鳳という琉球学者と首里四公子の協力を得て、収集した五千数百琉球寄語の資料をまとめ、編集・出版しようとした『球雅』と実に同一な物である。法政大学沖縄文化研究所比嘉実先生『「琉球記」と幻の琉漢辞典「球雅」』（上・下）（沖縄タイムス1995年5月1日、2日）の論文と先生が1995年12月8日東京外国語大学アジア・アフリカ言語研究所での学術講演はそれについて、全面的に解明した。筆者も第六回中琉歴史関係学術研究会（1996年10月北京）に提出した論文『明清使録所記琉球語言文字』の中に『琉球記』と『球雅』の関係について、資料を加わって、更に確論した。本文における『琉球記』地名も殆んど李鼎元の前回に來た冊封使周煌が書いた『琉球国志略』からそのまま写した。こんな事ができるのは李鼎元以外には考えられない。これは『「琉球記」即ち「球雅」』の説に対して、もう一つ有力な根拠とも言える。

## 三、参考資料について

琉球地名資料は主に『琉球人名地名辞典』（阪巻駿三 1964年）、『沖縄語辞典』附録『首里方言読みによる地名一覧』（国立国語研究所 1925年）と『角川日本地名大辞典』47沖縄県巻（角川日本地名大辞典編纂委員会 1985年）を参考する。『琉球人名地名辞典』にのa、b、c、dはそれぞれ1879年（明治十二年）以前の琉球音、1879年以後の日本標準音、1900年頃あるいは終戦頃まで作者の発音、1937年沖縄教育に採用された発音。

中国語の発音は当時作者李鼎元が任職している京城、清代官話標準語音の北京音を中心とする。主に『李氏音鑑』（1985年 李汝珍）、『音韻逢源』（1840年 裕恩）の音系を参考する。李鼎元の出身地四川羅江の方言は楊時逢『四川方言調査報告』（台湾 1984年）の羅江県部份を参考する。

## 四、音記符号について

国際音聲符号で統一に音記する。各項目の後ろにある←→の前後の〔 〕内は清代（北

京)官話音と解説音(琉球音)である。引用文の後ろの( )内に「=」(同じ)、「←」(～から変化してきた)、「→」(～へ変化してゆく)の後ろは国際音記である。

1. 琉球曰倭急拿 [uotçina] ↔ [uotfina:]

琉球館訳語に「琉球人 倭及奴必周」[琉球 uokinu]、陳侃使琉球録に「琉球人 倭拿必周」[琉球 uokina]、中山伝信録に「沖縄 屋其惹、[uk (tç') inia]、琉球入 学見聞録に「琉球 烏吉逆呀」[uk (tç) inia] とある。沖縄語辞典「沖縄 ?ucinaa」(?u←uo、ci=tçi←ki naa←naua) とある。

2. 日本曰亞馬吐 [iamat'u] ↔ [iamatu]

琉球館訳語に「日本人 亞馬奴必周」[日本 iamanu]、蕭崇業使琉球録に「日本人 亞馬吐必周」「日本 iamat'u] とある。沖縄語辞典に「日本本土 'jamatu」('j=i) とある。

3. 島曰什麻 [sɿma] ↔ [ʃima]

おもろさうし「島 しま」、琉歌全集に「島 shima」(shi=ʃi) とある。沖縄語辞典に「島 sima」(si=ʃi) とある。

4. 嶼曰叔 [su] ↔ [ʃiu]

学研漢和大事典に「嶼 しょ」[ʃio] とある。首里方言は「よ」をiuと読む。

5. 金城曰喀那骨昔骨 [k'anakusiku] ↔ [kanagusiku]

琉球人名地名字典に「金城 (a)kanagusiku」、沖縄語辞典に「金城 kanaguʃiku」(ʃi=si) とする。金城村は首里王宮の所在。琉球国志略に「首里は王宮の所在。間切と称しない。属村県は二十一有り：崎山、金城、内金城、新橋、赤平、儀保、西儀保、末吉、山川、新川、殿川、寒川、大中、鳥堀、汀白次、赤田、姑場川、桃原、當藏、真和地、立岸」とある。

6. 新橋曰迷八麻 [mipama] ↔ [miibaʃi]

角川日本地名大辞典に「みいばし村 新橋村(那覇市)、王府時代の村名、首里のうち。」とある。琉球国志略に「新橋は王宮の東北にある。」とある。「麻」の記音は間違っていると考えられる。

7. 赤平曰阿喀許納 [ak'axyna] ↔ [akaΦira]

琉球人名地名字典に「赤平 (a)akafira」(fi=Φi) とある。沖縄語辞典に「赤平 ?akahwira」 とある (?a←a hwi=Φi)。琉球国志略に「赤平は王宮の北にある」とある。第四音節子音 n と r の対音は合わない。これはおそらく作者李鼎元の四川羅江県方言的なまりである。羅江方言は n、l (r に近い) が区別しない。

8. 儀保曰日不 [ɿɿpu] ↔ [dʒibu]

琉球人名地名字典に「儀保 (a)jibu」(ji=dʒi)、沖縄語辞典に「儀保 ziibu」 とある (zi=dʒi、ʒi)。琉球国志略に「儀保は朱平村の北にある」とあり、「朱平」は

「赤平」の誤りである。

9. 末吉曰昔石 [siʃl] ↔ [si: ʃi]

琉球人名地名字典に「末吉 (a)stshi」(st=si: shi=ʃi)、沖縄語辞典に「末吉 ʃiisi」とある (ʃii=si: si=ʃi)。琉球国志略に「末吉 王宮の北にある」とある。

10. 新川曰阿納喀 [anak'a] ↔ [araka:]

琉球人名地名字典に「新川 (c)arakā」(kā←kaua) とある。納 na と ra は合わない対音で、羅江方言音である。

11. 殿川曰午獨奴喀 [utunuk'a] ↔ [udunga:]

沖縄語辞典に「大鈍川 ʔuduNgaa」とある (ʔu←u gaa=ga: ←gawa)。角川日本地名大辞典に「方言ではウドゥンガーといい、御殿川とも書く。」とある。

12. 寒川曰送喀 [suŋk'a] ↔ [sunga:]

琉球人名地名字典に「寒水川 (a)sungā」沖縄語辞典に「寒水川 suNgaa」とある (gaa=ga: ←gaua)。「寒川」は真中に「水」という字を書き落としたと考えられる。

13. 天中曰午甫鐘 [ufutsuŋ] ↔ [uΦutʃun]

琉球人名地名字典に「大中 (a)ufuchun」(f=Φ ch=tʃ)、沖縄語辞典に「大中 ʔuhucuN」(ʔu←u h=Φ c=tʃ) とある。

琉球国志略に「大中」は首里二十一日村の一つで、琉球訳に「天中」は「大中」で、「天」は「大」の誤字だと考えられる。角川日本地名大辞典に「方言ではウフチュンといい、中国音の影響があると思われる。」とある。

14. 鳥堀曰東主木一 [tuŋʃumui] ↔ [tunʒumui]

琉球人名地名字典に「鳥小堀 (a)tunjumui」(ju=dʒu)、沖縄語辞典に「鳥小堀 tuNzumui」とある (zu=dʒu, ʒu)。角川日本地名大辞典に「方言ではトゥンジュムイといい。」が有る。琉球国志略に「鳥堀」は首里二十一日村の一つである。琉球訳にの「鳥」は「鳥」の誤字で、琉球国志略とともに地名の中の「小」字を書き落とした。

15. 汀白茨曰的石喇即 [tiʃl̥latçi] ↔ [tisiradz̥i]

沖縄語辞典に「汀志良次 tiʃirazi」とある (ʃi=si zi=dʒi, ʒi)。角川日本地名大辞典に「方言ではティシラジという。」が有る。琉球国志略に「汀白次」は首里二十一日村の一つである。「次」は「茨」と書くべき。今の地名の「志良」は何時から「白」のように書いたか、また研究が必要。

16. 赤田曰阿喀打 [ak'ata] ↔ [akata]

琉球人名地名字典に「赤田 (ab)akata」、沖縄語辞典に「赤田 ʔakata」とある (ʔa=a)。

17. 姑場川曰古八喀 [kupak'a] ↔ [kubaga:]

琉球人名地名字典に「久場川 (a)kubagā」、沖縄語辞典に「久場川 kubagaa」と

ある (gaa=ga: ←gaua)。琉球国志略にも「姑場川」とあり、首里二十一村県の一つである。

18. 桃源曰掇八禄 [tuopalu] ↔ [to: baru]

琉球人名地名字典に「桃原 (ab)tōbaru」、沖縄語辞典に「桃原 toobaru」とある (too=to:)。桃原は首里南風平等のうち。琉球国志略に首里二十一村県の中も「桃原」が有る。琉球譯の「源」は諸書の「原」と違う。

19. 當藏曰掇奴骨納 [tuonukuna] ↔ [to: nukura]

琉球人名地名字典に「當藏 (a)tōnukura」、沖縄語辞典に「當藏 toonukura 首里一南風之平等。」とある (too=to:)。na は ra と対音、方言である。

20. 真和地曰麻日 [mazɿ] ↔ [ma: dʒi]

琉球人名地名字典に「真和志 māji (ji=dʒi)、沖縄語辞典に「真和志 maazi」とある (maa=ma: zi=dʒi, ʒi)。琉球国志略にも首里二十一村県の一つとして「真和地」が有り、「地」と「志」が違う。

21. 立岸曰達的及石 [tatitʃiʃi] ↔ [tatidʒiʃi]

沖縄語辞典に「立岸 tacizisi (ci=tʃi←ti←te zi=dʒi←gi si=ʃi) とある。

22. 泊村曰獨買木納 [tumaimuna] ↔ [tumaimura]

琉球人名地名字典に「泊 tumai」、沖縄語辞典に「泊 tumai 那覇 中頭一中城 間切」「村 mura」とある。中山伝信録、琉球国志略、琉球入学見聞録にはともに「泊 土馬爺 [t'umai (ie)] とある。「琉球国志略」に「首里の西の五里 (2.5キロ) にある」「間切に入れない」とある。

23. 那覇曰那發 [nafa] ↔ [na: Φa]

沖縄語辞典に「那覇 naahwa (naa=na: hwa=Φa) とある。角川日本地名大辞典に「方言ではナーファという。…方言でナファは那覇の港をいう。」とある。「那覇」は郭汝霖使琉球録に「那覇」、胡靖「杜天使冊封琉球真記奇觀」に「那覇」と書く。琉球国志略に「那覇は間切に入れない」「首里から四十里 (二十キロ) に有る。属村県は六つ有り：東県、西県、泉崎、若狹町、辻山、渡地」とある。

24. 泉崎曰一宗雜及 [itsunʒatʃi] ↔ [izunʒatʃi]

琉球人名地名字典に「泉崎 (a)izunʒachi (chi=tʃi←ki)、沖縄語辞典に「泉崎 ?izunʒaci」とある (?i←i ʒu=zu ʒa=za ci=tʃi←ki)。

25. 若狹曰瓦喀煞馬及 [uak'aʃamatʃi] ↔ [uakasamatʃi]

琉球人名地名字典に「若狹町 (ab)wakasamachi (chi=tʃi)、沖縄語辞典に「若狹町 'wakasamaci 那覇。」('wa←ua ci=tʃi) とある。那覇の所属村県として『琉球国志略』にも「若狹町」が有り、琉球訳とともに「狹」を誤字「狹」となった。羅江方言に「煞」は sa と読む。

26. 迭山曰即日 [tsizɿ] ↔ [tsi: dʒi]

沖縄語辞典 (150) に「辻 çiiizi」(çii=tsi: zi=dʒi, ʒi) とある。中山伝信録に「辻山 失汁山」(失汁 sɿtʂɿ) とある。「琉球記」の「迭」は「辻」の誤字。李鼎元使琉球記六月二十日の日記に以下のように述べている。「十」と「失」との区別がなく、多分「辻」は「迭」の字のあやまりなのであろう。『説文』に「迭ハ更迭ナリ」とある。辻山の左には波上があり、右には天久山があつて、実際に更迭の意味がある。「失」をあやまって「十」とし、遂に「辻」としたのである。」(原田禹雄訳注『使琉球記』P 234から)「辻」は日本国字で、中国の「迭」と意味も語源も全く関連ない。

27. 三渡地曰瓦恒日 [uaxejɿ] ↔ [uatandʒi]

琉球人名地名字典に「渡地 (a) watanji」(ji=dʒi) とある。角川日本地名大辞典に「わたんじ 渡地 (那覇市)。…地名は、対岸の垣花への渡船場だったことにちなむ。」とある。琉球国志略に「渡地」は那覇の属村である。

「琉球記」にの地名は殆ど琉球国志略を参考して書き入れられた。那覇の属村の順も同じく泉崎、若狹町、辻山、三渡地である。琉球記に「三渡地」の「三」は外の琉球資料も合わなく、衍字だと判断できる。又、第二対音字の「恒」は「tan」の音と大いに違って、字形に近似の「但」tan の誤字だと推測できる。

28. 久米曰骨米 [kumi] ↔ [kumi]

琉球人名地名字典に「久米 (a) kumi」、沖縄語辞典に「久米村 kuniNda」、「久米島 kumizima 島尻」とある。角川日本地名大辞典に「くめ 久米 (那覇市) 方言ではクニンダという。」とある。中山伝信録に「久米 那覇にある。」琉球国志略に「久米は衆という字で土音は若念搭、一字三音で、今は誤って久米と書く。那覇の東にある。属村県が四つ有り：東門村、西門村、北門村、南門村。」とある(若念搭 kunienta)。琉球譯に記した音は「久米」で、「久米村」ではない。

29. 天久曰阿密骨 [amiku] ↔ [amiku]

琉球人名地名字典に「天久 (a) amiku」、沖縄語辞典に「天久 ?amiku」(?a←a) とある。天久は真和志十二属村県の一である。琉球国志略に「真和志は首里から五里(2.5キロ)がある。属村県が十二有り：識名、國場、牧志、天久、松川、與儀、龜田、安里、湊川、古波藏、仲井間、上間」とある。

30. 松川曰麻即略 [natsik'a] ↔ [matsiga:]

琉球人名地名字典に「松川 (a) matsigā」、沖縄語辞典に「松川 maçigaa」(çi=tsi gaa=gā: ←gaua) とある。

31. 大門曰午甫 [ufu] ↔ [uΦu]

角川日本地名大辞典 (334) に「久米大通り かつては南の起点と北の終点に門が

あり、南門をウフジョウ（大門）、北門をニシンジョウ（西武門）といった。」とある。

「午甫」の対音はウフジョウの前二音節 (uΦu) である。琉球国志略に「久米は東門村、西門村、北門村、南門村四つの属村県が有り、南門村は大門村とも言い、また普門地の名も有る。」とある。

32. 若識名曰時及宜雅 [sɿtçiniia] ↔ [ʃitʃinia]

琉球人名地名字典に「識名 (a)shichina」(shi=ʃi, chi=tʃi ta←nia)、沖縄語辞典に「識名 sicina」(si=ʃi ci=tʃi na←nia) とある。

「若識名」の「若」は衍字だと考えられる。北京官話に「宜」は i と読む、ni（硬口蓋化子音）と読むのは方言音である。

33. 牧志曰麻及志 [matçitʃɿ] ↔ [matʃiʃi]

琉球人名地名字典に「牧志 (a)machishi」(chi=tʃi←ki shi=ʃi)、沖縄語辞典に「牧志 macisi」(ci=tʃi←ki si=ʃi) とある。

34. 與儀曰由日 [iuɹɿ] ↔ [iu: dʒi]

琉球人名地名字典に「與儀 (a)yūji」(ji=dʒi)、沖縄語辞典に「与儀 'juuzi」('juu=iu: zi=dʒi, ʒi) とある。

35. 亀田曰喀密打 [k'amita] ↔ [kamida]

琉球人名地名字典に「亀田 (a)kamida」とある。角川日本地名大辞典に『真嘉比康熙49年（1710）向姓2世朝資が「亀田地頭職」に任じられ、朝資は同年10月嘉味田と改名している。「中山伝信録」では真嘉比村に代わって亀田が見える。』とある。案ずるに、上文の「中山伝信録」は実に「琉球国志略」の誤り。

36. 安里曰阿煞獨 [aʃatu] ↔ [asatu]

琉球人名地名字典に「安里 (a)asatu」、沖縄語辞典に「安里 ʔasatu」とある。羅江方言には煞が<sup>s</sup>sa と読む。

37. 湊川曰密那獨喀 [minatuk'a] ↔ [minatukaɾ]

琉球人名地名字典に「湊川 (a)'Natugā」('Na←mana gā←gaua) とある。

38. 古波藏曰古及古瓦 [kutçikuua] ↔ [kuΦangua]

琉球人名地名字典に「古波藏 (a)kufangwa」(fan=Φan)、沖縄語辞典に「古波藏 kuhwaNgwa」(hwaN=Φan) とある。

「及」は第二音節の「Φan」と合わなく、「方」[faŋ] の誤字だと考えられる。

39. 仲井間曰那喀一麻 [nak'aima] ↔ [nagaima]

琉球人名地名字典に「仲井間 nakēma」(kē=ke: ←kai)、沖縄語辞典に「仲井間 nakeema」(kee←kai) とある。

40. 上間曰尾府 [uifu] ↔ [ui: ma]

琉球人名地名字典に「上間 (a)'wima」、沖縄語辞典に「上間 'wiima」とある。

「府」fu は ma と対音が合わなく、「府」は「麻」ma の誤字だと考えられる。

41. 南風原曰懷八喇 [xuaipala] ↔ [Φnaipara]

琉球人名地名字典に「南風原 (a) febaru (d) haebara」(h=xu←Φu)、沖縄語辞典に「南風原 hweebaru」(hwee=Φue:←Φuai) とある。琉球国志略に「南風原は首里の西に五里(2.5キロ)の所にある。属村県は七つあり：宮平、津嘉山、内嶺、本部、喜屋武、神里、平川。」とある。

42. 宮平曰密芽打一喀 [miiataik'a] ↔ [mia: दौरa]

琉球人名地名字典に「宮平 (a) myādera (b) miyadaira」、沖縄語辞典に「宮平 mjaadeera」(mjaa=mia: dee←dai) とある。

「喀」k'a は「ra」と合わなく、「喀」は「喇」la の誤字でも考えられる。

43. 内嶺曰五今密 [utçinmi] ↔ [utfinmi]

琉球人名地名字典に「内嶺 (a) uchinmi」(ch=tj) とある。角川日本地名大辞典に「内嶺村 方言ではウチンミという。」とある。

44. 本部曰木獨不 [mutupu] ↔ [mutubu]

琉球人名地名字典に「本部 (a) mutubu」、沖縄語辞典にも「mutubu」とある。

45. 喜屋武曰講亦曰及楊 [tçiaŋ, tçiiŋ] ↔ [tçian]

琉球人名地名字典に「喜屋武 (a) chan」(ch=tçi←ki)、沖縄語辞典に「喜屋武 caN」(c=tçi) とある。琉球国志略に「喜屋武 “腔” のように読み、三字一音である」とある(腔 tçiaŋ)。

46. 神星曰辰煞獨 [tɕ'enɕatu] ↔ [kanzatu]

琉球人名地名字典に「神里 (a) kanzatu」、沖縄語辞典に「神里 kaNɕatu」(ɕa=dza) とある。琉球訳の「星」は「里」の誤字である。ほかに、「辰」も対音 kaN と合わなく、似ている「看」kan という字の誤りだと考えられる。

47. 平川曰許納喀 [xynak'a] ↔ [Φiraga:]

琉球人名地名字典に「平川 (a) firakā」(fi=Φi)、沖縄語辞典に「平川 hwiragaa」(hwi=Φi gaa=ga:←gaua) とある。「許」の発音 xy は xui に近く、Φi (子音と母音の間に合口の w が有る) と合える。納 na と ra の対音も羅江方言の原因だと考えられる。

48. 東風平曰古金答 [kutçinta] ↔ [kutfinɕa]

琉球人名地名字典に「東風平 (a) kuchinda」、沖縄語辞典に「東風平 kucinda」(cin=tfin) とある。琉球国志略に「東風平 首里の南二十五里(12.5キロ)、山南省の範囲にある。属有する村と県は九つ：東風平、富盛、志多伯、世名城、友寄、高良、山川(首里のある地名と同名)、宜壽次、當銘。」とある。

49. 富盛曰獨不一 [tupui] ↔ [tumui]



琉球人名地名字典に「富盛 (a)tumui」、沖縄語辞典に「富盛 tumui」とある。琉球訳に「m」を「p」と読み、不は木の誤字だと思われる。

50. 志多伯曰什打發古 [ʃɿʔtafaku] ↔ [ʃitaΦaku]

琉球人名地名字典に「志多伯 (a)shitafaku」(shi=ʃi)、沖縄語辞典に「志多伯 sitahwaku」(si=ʃi hwa=Φa)とある。

51. 世名城曰欲那骨昔骨 [ynakusiku] ↔ [iunagusiku]

琉球人名地名字典に「世名城 iunagushiku」、沖縄語辞典に「世名城 'junaguʃiku」('ju=iu ʃi=i)とある。

52. 友寄曰獨木息 [tumusi] ↔ [tumusi]

琉球人名地名字典に「友寄 (a)tumusi」、沖縄語辞典に「友寄 tumusi」(si=ʃi)とある。

53. 高良曰答喀納 [tak'ana] ↔ [takara]

琉球人名地名字典に「高良 (ab)takara」、沖縄語辞典に「高良 takara」とある。「納 na」は方言音。

54. 宜壽久曰日息息 [ɹɿʔçiçi] ↔ [ʒiʔʃi]

琉球人名地名字典に「宜壽次 (a)jisshi」(jisshi=ʒiʔʃi)、沖縄語辞典に「宜壽次 ziQsi」(ziQsi=ʒiʔʃi)とある。琉球訳の宜壽久は宜壽次で、「久」は「次」の誤字である。琉球国志略も「宜壽次」とした。対音字の「日息息」は「日息」とすべき、もう一つの「息」は衍字だと考えられる。

55. 當銘曰掇密 [tomi] ↔ [to:mi]

琉球人名地名字典に「當銘 (a)tōmi」、沖縄語辞典に「当銘 toomi」(oo=o:)とある。

56. 西原曰宜什八納 [niʃɿʔpana] ↔ [niʃibara]

琉球人名地名字典に「西原 (ab)nishibaru」(shi=ʃi)、沖縄語辞典に「西原 nisibaru」(si=ʃi) 島尻一大里間切 中頭一浦添間切 中頭一美里間切 中頭一与那城間切 宮古一平良間切。」「西原間切 nisibaru 中頭」とある。角川日本地名大辞典によると、同じ西原は方言で大里間切、浦添間切、美里間切の「西原」は「ニシバル」と読み、平良間切の西原は「ニスムラ」と読み、与那城間切と西原間切の「西原」は「ニシハラ」と読む。間切の名として嘉靖15年(1536)の辞令書にも「にしはらまきり」と書いた。だから、対音最後の音節は琉球訳のように「na」(raの羅江方言対音)と読むべき、「ra」ではない。

琉球国志略に「西原」は中山省のうち十四間切の一で、西原は「首里から七里(3.5キロ)の東にあり、属有する村と県は十六有り：幸地、小橋川、安室、桃原(首里のある地名と同名)、我謝、翁長、平郎、小那覇、棚原、末吉(首里のある地

名と同名)、石嶺、嘉手刈、小波津、與那城(與那府と同名)、内間、呉屋。」とある。  
この記録は王府時代間切中の村設置は基本的に一致する。

57. 幸地曰割及 [ketçi] ↔ [ko:tçi]

琉球人名地名字典に「幸地 (ab)kōchi」(chi=tçi)、沖縄語辞典に「幸地 kooci」  
(koo=ko: ci=tçi) とある。

58. 小橋川曰古發甲 [kufa(?)tyia] ↔ [kuΦafitfia]

琉球人名地名字典に「小橋川 (a)kufashicha」(fa=Φa shi=fi cha=tfia)、沖縄語辞典に「小橋川 kuhwasica」(hwa=Φa si=fi ca=tfia) とある。

琉球訳には第三音節の「fi」に対音字がない。

59. 安室曰阿木禄 [amulu] ↔ [amuru]

琉球人名地名字典に「安室 (a)amuru」、沖縄語辞典に「安室 ?amuru」(?a←a) とある。

60. 我謝曰喀佳 [k'atçia] ↔ [ga:dzia]

琉球人名地名字典に「我謝 (a)gāja」(ja=dzia)、沖縄語辞典に「我謝 gaaza」  
(gaa=ga: za=dzia) とある。

61. 翁長曰午那喀 [unak'a] ↔ [unaga]

琉球人名地名字典に「翁長 wunaga」(wu=u)、沖縄語辞典に「翁長 'unaga」とある。

62. 平良曰徳納 [tena] ↔ [te:ra]

琉球人名地名字典に「平良 (a)tēra」、沖縄語辞典に「平良 teera」(tee=te:) とある。納は方言音である。

琉球国志略と琉球訳とともに「良」を「郎」として、誤字である。

63. 棚原曰打那八禄 [tanapalu] ↔ [tanabaru]

琉球人名地名字典に「棚原 (ab)tanabaru」、沖縄語辞典に「棚原 tanabaru」とある。

64. 石嶺曰一審密 [iʃenmi] ↔ [iʃinmi]

沖縄語辞典に「石嶺 ?isiNmi」(siN=ʃin) とある。角川日本地名大辞典に「石嶺方言ではイシンミという。」とある。

65. 嘉手刈曰喀的喀禄 [k'atik'alu] ↔ [kadikaru]

琉球人名地名字典に「嘉手刈 (a)kadikaru」、沖縄語辞典に「嘉手刈 kadikaru」とある。

琉球国志略と琉球訳の「刈」は「刈」と書くはずである。

66. 小波津曰骨發即 [kufatsi] ↔ [kuΦatsi]

琉球人名地名字典に「小波津 (a)kufatsi」(fa=Φa)、沖縄語辞典に「小波津

kuhwaçi」(hwa=Φ a çi=tsi) とある。

67. 内間曰午及麻 [utçima] ↔ [utɕima]

琉球人名地名字典に「内間 (ab) uchima」(chi=tɕi)、沖縄語辞典に「内間 ʔucima」(ci=tɕi) とある。

68. 呉屋曰骨雅 [kuia] ↔ [guia]

琉球人名地名字典に「呉屋 (a)guya」(ya=ia)、沖縄語辞典に「呉屋 guja」(ja=ia) とある。

69. 浦添曰武納昔 [unaçi] ↔ [uraɕi:]

琉球人名地名字典に「浦添 (a)urasi」、沖縄語辞典に「浦添 ʔurasii」(sii=ɕi:) とある。納は方言音である。

琉球国志略に「浦添 首里から三十里(15キロ)の東にある。属村県は十一有り：浦添、伊祖、牧港、安波茶、澤岬、屋富祖、西原(西原間切と同名)、内間(西原のある地名と同名)、勢理客、前田。」とある。

70. 牧港曰麼及拿度 [matçinatu] ↔ [matɕinatu]

琉球人名地名字典に「牧湊 (a)machinatu」(chi=tɕi)、沖縄語辞典に「牧港 macinatu」(ci=tɕi) とある。

71. 澤岬曰打骨什 [takuɕɿ] ↔ [takuɕi]

琉球人名地名字典に「澤岬 (ab) takushi」(shi=ɕi)、沖縄語辞典に「沢岬 takusi」(si=ɕi) とある。

琉球訳の「岬」は誤字である。琉球人名地名字典と角川日本地名大辞典は「岬」とする。琉球国志略は沖縄語辞典と同じ“岬”である。

72. 屋富祖曰雅甫 [iaɸu(?) ] ↔ [iaΦusu]

琉球人名地名字典に「屋富祖 yafusu」、沖縄語辞典に「屋富祖 ʔahusu」(ja=ia hu=Φu) とある。

琉球訳は第三音節の「su」に対音しなかった。

73. 勢理客曰日甲骨 [ɿtçiaɸu] ↔ [dɕitɕiaɸu]

琉球人名地名字典に「勢理客 (a)jitchaku」(jit=dɕi? cha=tɕia)、沖縄語辞典に「勢理客 ɿtçiaɸu」(ɿtçia=dɕi? ca=tɕia) とある。

74. 前田曰墨打 [meta] ↔ [me:da]

琉球人名地名字典に「前田 (a)mēda」、沖縄語辞典に「前田 meeda」(ee=e: ← ae) とある。

「墨」は北京話に「mo」と読むのと違って、四川方言は「me」と読む。

75. 宜野灣曰奴彎 [(?)nuuan] ↔ [dɕinuan]

琉球人名地名字典に「宜野湾 (a)jinōn」(ji=dɕi nōn=no:n)、沖縄語辞典に

「宜野湾 zinooN」(zi=dʒi nooN=no:n←nouan) とある。

琉球訳には「宜 dʒi」の対音字がない。

琉球国志略に「宜野湾 首里から三十里(15キロ)の東にある。属有する村県は十二有り：宜野湾、謝名、普天間、新城、具志川(宜志川間切と同名)、城田、嘉敷、安仁屋、伊佐、喜友名、野嵩、我如古。」とある。

76. 謝名曰日雅那 [ʒʌiana] ↔ [dʒiana]

琉球人名地名字典に「謝名 (ab)jana」(ja=dʒia)、沖縄語辞典に「謝名 zana」(za=dʒia) とある。

77. 普天間曰福的麻 [futima] ↔ [Φutima]

琉球人名地名字典に「普天間 (a)futima」、沖縄語辞典に「普天間 hutima」(hu=Φu) とある。

78. 具志川曰骨什中 [kuʂʌtʂiun] ↔ [guʃitʂia:]

琉球人名地名字典に「具志川 gushichā」(shi=ʃi chā=tʂia:)、沖縄語辞典に「具志川 gusicaa」(si=ʃi caa=tʂia:) とある。

琉球訳の対音字「中」は対音と合わなく、字形近似の「甲」(tʂia)の誤字だと推定する。

79. 嘉敷曰喀喀即 (kʰakʰatʂi) ↔ [kakadʒi]

琉球人名地名字典に「嘉敷 (a)kakazi」、沖縄語辞典に「嘉敷 kakazi」(zi=dʒi) とある。

80. 安仁屋曰安宜雅 [anniia] ↔ [annia]

琉球人名地名字典に「安仁屋 (b)aniya」、沖縄語辞典に「安仁屋 ʔaNna」(ʔaN=an na←nia) とある。

81. 伊佐曰一煞 [iʂa] ↔ [isa]

琉球人名地名字典に「伊佐 (ab)isa」、沖縄語辞典も「伊佐 ʔisa」とある。羅江方言に煞は sa と読む。

82. 喜友名曰及容那 [tʂiiunna] ↔ [tʂiunna]

琉球人名地名字典に「喜友名 (a)chunnā」(chun=tʂiun)、沖縄語辞典に「喜友名 cuNnaa」(cun=tʂiun naa=na:) とある。

83. 野嵩曰奴打及 [nutaki] ↔ [nudaki]

琉球人名地名字典に「野嵩 (a)nudaki」、沖縄語辞典に「野嵩 nudaki」とある。

84. 熱田曰阿答 [ata] ↔ [aʔta]

琉球人名地名字典に「熱田 (ab)atta」(atta=aʔta)、沖縄語辞典に「熱田 ʔaQta」(ʔaQta=aʔta) とある。

熱田は中城間切のうち。琉球国志略に「中城 首里から四十里(二十キロ)の東に

ある。属村と県は十九有り：中城、姑場、熱田、當間、鳥袋、粵間、和宇慶、屋宜、津瀬、安谷屋、伊集、渡口、喜舎場、添石、瑞慶覧、新垣、安里（真和志間切にある地名と同名）、中順、比嘉。」とある。

85. 鳥袋曰石麻不骨 [sɿmapuku] ↔ [ʃimabuku]

琉球人名地名字典に「鳥袋 (ab)shimabuku」(shi=ʃi)、沖縄語辞典に「鳥袋 simabuku」(si=ʃi) とある。

86. 奥間曰午即麻 [utima] ↔ [ukuma]

琉球人名地名字典に「奥間 (a)ukuma」、沖縄語辞典に「奥間 'ukuma」とある。

第二音節対音字「即」は「ku」に合わない。琉球国志略に「奥」は「粵」に誤っている。

87. 和宇慶曰我及 [uoki] ↔ [uo:ki]

琉球人名地名字典に「和宇慶 (a)wōki」(wō=uo:)、沖縄語辞典に「和宇慶 'ooki」(oo=o:) とある。

88. 津覇曰即話 [tsixua] ↔ [tsiΦa]

琉球人名地名字典に「津覇 (a)tsifa」(fa=Φa)、沖縄語辞典に「津覇 çihwa」(çi=tsi hwa=Φa) とある。

琉球国志略に「覇」を「瀬」と書く。

89. 安谷屋曰阿打里雅 [ataliia] ↔ [adaniia]

琉球人名地名字典に「安谷屋 (ab)adaniya」(ya=ia)、沖縄語辞典に「安谷屋 ?adaNna」とある。

「里 li」は ni と対音、羅江方言の発音である。

90. 渡口曰都骨及 [tukutçi] ↔ [tugutʃi]

琉球人名地名字典に「渡口 (a)tuguchi」(chi=tʃi)、沖縄語辞典に「渡口 tuguci」(ci=tʃi) とある。

91. 瑞慶覧曰即及蘭 [tsikilan] ↔ [dzikiran]

琉球人名地名字典に「瑞慶覧 zikiran」、沖縄語辞典に「瑞慶覧 zikiraN」(zi=dzi) とある。

92. 砂邊曰昔那必 [sinapi] ↔ [sinabi]

琉球人名地名字典に「砂辺 (a)sinabi」、沖縄語辞典に「砂辺 şinabi」(şi=si) とある。

93. 新垣曰阿喇喀及 [alak'atçi] ↔ [arakatʃi]

琉球人名地名字典に「新垣 (a)arakachi」(chi=tʃi)、沖縄語辞典に「新垣 ?arakaci」(ci=tʃi) とある。

94. 安里曰阿煞讀 [aşatu] ↔ [asatu]

琉球人名地名字典に「安里 (a)asatu」、沖縄語辞典に「安里 ʔasatu」とある。

95. 中順曰諸日翁 [tʃuzʌŋ] ↔ [tʃiundʒiun]

琉球人名地名字典に「仲順 (ab)chunjun」(chun=tʃiun jun=dʒiun)、沖縄語辞典に「仲順 cuNzuN」(cuN=tʃiun, zuN=dʒiun)とある。

琉球国志略と琉球訳は「仲」を「中」と書く。

96. 比嘉虚曰及牙 [xytʃiia] ↔ [Φidʒia]

琉球人名地名字典に「比嘉 (a)fija」、沖縄語辞典に「比嘉 hwiza」(hwi=Φi za=dʒia)とある。琉球国志略にも「比嘉」とある。

琉球訳に「及牙」は「比嘉」の音に合わなく、そのうえ、地名の「虚」も不可解。その「虚曰及牙」は「曰虚及牙」の誤りとすれば、「虚及牙」は「比嘉」の発音と合う。

97. 北谷曰甲當 [tʃiatag] ↔ [tʃiatan]

琉球人名地名字典に「北谷 (ab)chatan」(cha=tʃia)、沖縄語辞典に「北谷 catan」(ca=tʃia)とある。

北谷は中山のうちの間切である。琉球国志略に「北谷 比溪とも言う。首里から四十里(二十キロ)の北にある。稻田の多い間切である。属村と県は十二あり：北谷、濱川、砂邊、野国、野里、玉代勢、屋良、桑江、嘉手納、平安山、伊禮、前城。」とある。

98. 濱川曰話麻喀 [xuamak'a] ↔ [xamaga:]

琉球人名地名字典に「濱川 (a)hamagā」(ha=xa)、沖縄語辞典に「浜川 hamagaa」(ha=xa, gaa=ga:←gaua)とある。

99. 野国曰奴骨直 [nukutʃl] ↔ [nuguni]

琉球人名地名字典に「野国 (a)nugun (b)noguni」、沖縄語辞典に「野国 nuguN」(N←ni)とある。

琉球訳の「直」は発音 ni に合わなく、字形近似の「宜」の誤字だと考えられる。

100. 玉代勢曰達麻一昔 [tamaɪçi] ↔ [tamaifi]

沖縄語辞典に「玉代勢 tameesi」(mee←mai si=fi)とある。角川日本地名大辞典に「玉代勢 方言ではタメーシという。」とある。

地名の第二字は琉球国志略にも「代」と書き、琉球訳の「帯」は誤字である。

101. 屋良曰雅喇 [iala] ↔ [iara]

琉球人名地名字典に「屋良 yara」、沖縄語辞典に「屋良 'jara」とある。

102. 桑江曰豁一 [xuoi] ↔ [ku:ae]

琉球人名地名字典に「桑江 (b)kuwae」(ku:ae)、沖縄語辞典に「桑江 kwee」とある。

103. 嘉手納曰喀的那 [k'atina] ↔ [kadina:]

琉球人名地名字典に「嘉手納 (a) kadina」、沖縄語辞典に「嘉手納 kadinaa (naa=na:)」とある。

104. 平安名曰虚安那 [xyanna] ↔ [xianna]

琉球人名地名字典に「平安名 (b) hyanna (hy=xi)、沖縄語辞典に「平安名 hiaNna (hjaN=xian)」とある。

琉球国志略に「平安名」は「平安山」と書く。

105. 高志保曰打喀石不 [tak'aʃɿpu] ↔ [takafiʔpu]

琉球人名地名字典に「高志保 (a) takashippu (ship=ʃiʔ)、沖縄語辞典に「高志保 takasiQpu (siQ=ʃiʔ)」とある。

高志保は読谷山の属村である。琉球国志略に「讀谷山、首里から六十里（三十キロ）の東にある。属村と県は十六有り：讀谷山（座喜味とも言う）、高志保、喜名、宜間、渡具知、大灣、伊良皆、渡慶次、波平、長濱、瀬名壩、根波。」とある。

106. 伊良皆曰一蘭密牙 [ilanmiia] ↔ [iranmia]

琉球人名地名字典に「伊良皆 (a) iranmya」、沖縄語辞典に「伊良皆 ʔiraNmja (mja=mia)」とある。

107. 波平曰含日阿 [xanzɿa] ↔ [xandzia]

琉球人名地名字典に「波平 (ab) hanja (ha=xa ja=dzia)、沖縄語辞典に「波平 haNza (haN=xan za=dzia)」とある。

108. 長濱曰那喀發馬 [nak'afama] ↔ [nagaΦama]

琉球人名地名字典に「長濱 (ab) nagahama ((ha=xa←Φa)、沖縄語辞典に「長浜 nagahama (ha←Φa)」とある。

109. 瀬名埧曰什拿發 [ʃɿnafa] ↔ [ʃinaΦa]

琉球人名地名字典に「瀬名波 sinafa」、沖縄語辞典に「瀬名波 ʃinahwa (ʃi=si, ʃi hwa=Φa)」とある。

琉球訳の「埧」は琉球国志略の「壩」の簡体字。

110. 根波曰你發 [nifa] ↔ [niΦa]

琉球人名地名字典に「根波 (a) nifa (fa=Φa)」とある。

111. 勝連曰喀即隣 [k'atsilien] ↔ [katsiren]

琉球人名地名字典に「勝連 (b) katsuren」、沖縄語辞典に「勝連間切 kaQcin (kaQciN=kaʔtʃin←katsirin←katsuren)」とある。

琉球国志略に「勝連 首里から六十里（三十キロ）の東北にある。属村と県は十有り：勝連、神谷、比嘉（中城のある地名と同名）、平敷屋、平安名、内間（浦添のある地名と同名）、新垣（中城のある地名と同名）、亀島、濱村、南原。」とある。

112. 神谷曰喀米牙 [k'amiia] ↔ [kamiia]

琉球人名地名字典に「神谷 (ab)kamiya」、沖縄語辞典に「神谷 kamja」(mja=mia) とある。

113. 池宮城曰一直密雅骨昔骨 [its̥miiakusiku] ↔ [it̥jimia:gusiku]

琉球人名地名字典に「池宮城 (a)ichmyāgusiku」(h=t̥j myā=mia:) とある。

池宮城は與那城間切の村である。琉球国志略に「與那城 首里から五十里（二十五キロ）の東北にある。属村と県は六あり：仲田、平安座、安勢里、上原、池宮城、伊計。」とある。

114. 越來曰骨一骨 [kuiku] ↔ [gui:ku]

琉球人名地名字典に「越來 (a)gwīku」、沖縄語辞典に「越來 gwiiku」(wii=ui:) とある。

琉球国志略に「越來、首里から五十里（二十五キロ）の北にある。属村県が十有り：越來、照屋、安慶田、湖屋、上地、諸見里、山内、宇慶田、大古廻、中宗根。」とある。

115. 照屋曰的喇 [tila] ↔ [ti:ra]

琉球人名地名字典に「照屋 (a)tīra」、沖縄語辞典に「照屋 tiira」(ii=i:) とある。

116. 平敷屋曰許什甲 [xys̥t̥cia] ↔ [Φiʃit̥fia]

琉球人名地名字典に「平識屋 (a)fishicha」(shi=ʃi cha=t̥fia)、沖縄語辞典に「平敷屋 hwisica」(hwi=Φi si=ʃi ca=t̥fia) とある。

117. 諸見里曰木六密雜讀 [muliumitsatu] ↔ [murumidzatu]

琉球人名地名字典に「諸見里 (a)murunzatu (b)moromizato」、沖縄語辞典に「諸見里 muruN̄zatu」(N←mi ʒa=dza) とある。

118. 大古廻曰得古刹古 [tekuʂaku] ↔ [dekudzaku]

琉球人名地名字典に「大工廻 (a)dekuzaku」、沖縄語辞典に「大工廻 dakuʒaku」(ʒa=dza)、角川日本地名大辞典に「大工廻 方言ではダクザクという。」とある。  
琉球訳の対音は第一音節が「da」と発音ではなく、「de」と読むべきである。

琉球訳の「大古廻」は「古」が同音による誤字、「廻」は近形による誤字。琉球国志略には「大古廻」と書き、「古」も誤字。刹是北京では sa、羅江では sa と読む。

119. 中宗根曰那喀竹你茶 [nak'at̥sunits'a] ↔ [nakadzuni]

琉球人名地名字典に「仲宗根 (a)nakazuni」、沖縄語辞典に「仲宗根 nakazuni」(ʒu=dzu) とある。

琉球訳の「中」は「仲」の誤字、対音字「茶」は衍字である。

120. 美里曰密煞讀 [miʂatu] ↔ [misatu]



琉球人名地名字典に「美里 (a)'Nzatu (b)mizato」('N=mi)、沖縄語辞典に「美里間切 'Nzatu」('N←mi za=dza) とある。

琉球国志略に「美里 首里から六十里（三十キロ）の北にある。属村県は十八有り：嵩原、高原、恩納（北山の恩納と区別するため、東恩納とも言う）、石川、古謝、伊波、野原、松本、田里、楚南、比屋根、興儀（真和志間切のある地名と同じ）、宮里、知花、池原、嘉手苅、登山、山城。」とある。

121. 嵩原曰打及八禄 [tatçipalu] ↔ [tatfibaruru]

琉球人名地名字典に「嵩原 (a)tachibaru」(chi=tfi) とある。

122. 松本曰麻即木讀 [matsimutu] ↔ [matsimutu]

琉球人名地名字典に「松本 (a)matsimutu」、沖縄語辞典に「松本 maçimutu」(çi=tsi) とある。

123. 比屋根曰許牙滾 [xyiakun] ↔ [xia:gun]

琉球人名地名字典に「比屋根 (a)hyāgun」(hyā=xia:)、沖縄語辞典に「比屋根 hjaaguN」(hja=xia:) とある。

124. 上江洲曰午一即 [uitçi] ↔ [ui:dži]

琉球人名地名字典に「上江洲 (a)'włzi」(ui:dži)、沖縄語辞典に「上江洲 ?wiizi」(ui:dži)、角川日本地名大辞典に「上江洲 方言ではウィージという。」とある。

上江洲は具志川間切の属村である。琉球国志略に「具志川 首里から六十里（三十キロ）の東にある。属村県は十五有り：安里（真和志にある地名と同じ）、上江洲、宇堅、祝嶺、中嶺、天願、高江洲、田場、田崎、安慶名、江洲、大田、榮野比、川崎、兼嘉段。」とある。

125. 祝嶺曰叔公米 [şukugmi] ↔ [fjukunmi]

琉球人名地名字典に「祝嶺 (a)shukunmi」(shu=fju) とある。

126. 榮野比曰一奴必 [inupi] ↔ [inubi]

琉球人名地名字典に「榮野比 (a)yinubi」、沖縄語辞典に「榮野比 ?inuhwi」(hwi=Φi←bi) とある。

127. 兼嘉段曰喀你喀旦 [k'anik'atan] ↔ [kanikadan]

琉球人名地名字典に「兼嘉段 (a)kanikadan」、沖縄語辞典に「兼箇段 kanikadaN」 とある。

128. 湧稻國曰瓦及那古一 [uatçinakui] ↔ [uatfinaguni]

琉球人名地名字典に「湧稻国 (a)wacinagun (b)wakiinakuni」(chi=tf: kun ←kuni)、沖縄語辞典に「湧稻国 'wacinagui」(ci=tfi gui←kuni) とある。

湧稻国は大里間切の属村である。琉球国志略に「大里 首里から二十里（十キロ）

の南にある。属村県は十七有り：與那原、與古田、湧稻国、板良敷、仲程、與那覇、稲福、上與那原、大城、宮城、古堅、目取真、島袋（中城にある地名と同じ）、南風原（南風原間切と同名）、高宮城、真境名、當真。」とある。

129. 板良敷曰一打喇子及 [italatsltçi] ↔ [itaradgitçi]

琉球人名地名字典に「板良敷 (a)icharajichi (b)itarashiki」(cha←ta, ji=dgi chi=tçi←ki)、沖縄語辞典に「板良敷 ?icarazici」(ca=tçia←ta zi=dgi ci=tçi)とある。

130. 仲程曰那喀甫讀 [nak'afutu] ↔ [takaΦudu]

琉球人名地名字典に「仲程 (a)nakafudu」(fu=Φu)、沖縄語辞典に「仲程 nakahudu」(hu=Φu)とある。

131. 稲福曰一那佛骨 [inafuku] ↔ [inaΦuku]

琉球人名地名字典に「稲福 (ab)inafuka」(fu=Φu)、沖縄語辞典に「稲福 ?inahuku」(hu=Φu)とある。

132. 古堅曰甫禄金 [fulukin] ↔ [Φurugin]

琉球人名地名字典に「古堅 (a)furugin」(fu=Φu)、沖縄語辞典に「古堅 hurugiN」(hu=Φu)とある。

133. 目取真曰眉度禄麻 [meituluma] ↔ [miduruma]

琉球人名地名字典に「目取真 (a)miduruma」、沖縄語辞典に「目取真 miduruma」とある。

134. 中村渠曰那感打喀禮 [nakantak'ali] ↔ [nakandakari]

琉球人名地名字典に「中村渠 (a)nakandakari」、沖縄語辞典に「中村渠 nakaNdakari」とある。

中村渠は玉城間切の属村である。琉球国志略に「玉城 首里から四十里（二十キロ）の南にある。属村県が十一有り：玉城、中村渠、富里、絲数、垣花、富名腰、前川、當山、和名、奥武、志堅原。」とある。

135. 高官曰打喀密牙 [tak'amia] ↔ [takamia:]

琉球人名地名字典に「高官 (a)takamyā」、沖縄語辞典に「高官 takamjaa」(mjaa=mia:)とある。

琉球訳に「宮」は「官」に誤った。

136. 真境名曰麻煞及那 [maşakina] ↔ [madzakina]

琉球人名地名字典に「真境名 (a)majikina (bd)mazakena」(za=dza ki←ke)、沖縄語辞典に「真境名 mazikina」とある。

137. 當真曰掇麻 [tuoma] ↔ [to: ma]

琉球人名地名字典に「當間 (ab)tōma」、「當真 (ab)tōma」、沖縄語辞典に「當間

tooma」(oo=o:) とある。角川日本地名大辞典にも「当間 方言でもトウマという。」とある。

以上高宮、真境名、当間三村は大里間切のうち。

138. 糸数曰以獨喀即 [ituk'atsi]  $\longleftrightarrow$  [itukadzi]

琉球人名地名字典に「糸数 (a)ichukazi」(chu $\leftarrow$ tu $\leftarrow$ to)、沖縄語辞典に「糸数<sup>?</sup>icukazi」(cu=tʃiu $\leftarrow$ tu ʒi=dzi) とある。

139. 垣花曰喀及奴化那 [k'atçinuxuana]  $\longleftrightarrow$  [katʃinuxana]

琉球人名地名字典に「垣花 (a)kachinuhana」(chi=tʃi ha=xa)、沖縄語辞典に「垣花 kacinuhana」(ci=tʃi ha=xa) とある。

140. 富名腰曰甫那骨什 [funakuʃɿ]  $\longleftrightarrow$  [Φunakuʃi]

琉球人名地名字典に「富名腰 (a)funakushi」(fu=Φu, shi=ʃi)、沖縄語辞典に「富名腰 (舟越とも書く) hunakusi」(hu=Φu si=ʃi) とある。

以上の糸数、垣花、富名腰は玉城間切の村である。

141. 豊見城曰讀密骨昔骨 [tumikusiku]  $\longleftrightarrow$  [tumigusiku]

琉球人名地名字典に「豊見城 (a)timigusiku (b)tomigusuku」(to $\rightarrow$ tu si $\leftarrow$ su)、沖縄語辞典に「豊見城 timiguʃiku」(ʃi=si) とある。

琉球国志略に「豊見城 首里から四十里 (二十キロ) の南にある。属村県が十七有り：豊見城、饒波、長堂、翁長 (西原のある地名と同じ)、真玉橋、盛島、奥平、高嶺、儀保 (首里のある地名と同じ、宜保とも言う。)、我那覇、渡嘉敷、高安、伊良波、名嘉地、田頭、保榮茂、嘉数 (宜野湾のある地名と同じ。)」とある。

142. 饒波曰牛發 [niufa]  $\longleftrightarrow$  [niuΦa]

琉球人名地名字典に「饒波 (a)nūfa (b)nyoha」(nio $\rightarrow$ niu, fa=Φa)、沖縄語辞典に「饒波 nuhwa (nuuhwa, nihwa ともいう)」とある。

143. 真玉橋曰麻當八什 [matapʌʃɿ]  $\longleftrightarrow$  [madanbaʃi]

琉球人名地名字典に「真玉橋 (ab)madanbashi」(shi=ʃi)、沖縄語辞典に「真玉橋 madaNbasi」(si=ʃi) とある。

144. 盛島曰木力什麻 [mulɿʃɿma]  $\longleftrightarrow$  [muriʃima]

琉球人名地名字典に「盛島 murishima」(shi=ʃi) とある。

145. 奥平曰午骨石喇 [ukuʃɿla]  $\longleftrightarrow$  [ukuʃira]

琉球人名地名字典に「奥平 (a)ukudēra (c)okuhira」(o $\rightarrow$ u hi=xi $\rightarrow$  (口蓋化) ʃi) とある。

146. 伊良波曰一喇發 [ilafa]  $\longleftrightarrow$  [iraΦa]

琉球人名地名字典に「伊良波 (a)irafa」(fa=Φa)、沖縄語辞典に「伊良波<sup>?</sup>irahwa」(hwa=Φa) とある。

147. 名嘉地曰那喀及 [nak'atçi] ↔ [nakatʃi]

琉球人名地名字典に「名嘉地 (ab)nakachi」(chi=tʃi) とある。

148. 田頭曰答喀米 [tak'ami] ↔ [tagami]

琉球人名地名字典に「田頭 (a) taganmi (b) tagami」、沖縄語辞典に「田頭 tagaNmi」(gaNmi←gami) とある。

149. 保榮茂曰兵 [pig] ↔ [bin]

琉球人名地名字典に「保榮茂 (a) bin」、沖縄語辞典に「保榮茂 biN」とある。

150. 小禄曰午禄骨 [uluku] ↔ [uruku]

琉球人名地名字典に「小禄 (a) uruku」、沖縄語辞典に「小禄 ʔuruku」とある。

琉球国志略に「小禄間切、首里から二十里（十キロ）の南にある。属村県は十一有り：小禄、上原、當間（中城間切のある地名と同じ）、卒宮城、大嶺、儀間、湖城、具志、多加良、安次嶺、赤嶺。」とある。

151. 雙牛宮曰骨什密牙 [kuʃʌmia] ↔ [gnʃimiiɑː]

琉球人名地名字典に「卒宮 (b) gushimiyā」、沖縄語辞典に「卒宮城 gusimjaaguʃiku」(si=ʃi mjaɑ=miaː ʃi=si) とある。

琉球国志略に「卒宮城、土音で卒が五十 (uʃʌ)、宮が訛 (pi)、城が五十姑 (uʃʌku) と読み、三つの文字は六音節である。」とある。琉球訳は「卒」を「雙牛」という二文字に書き、「双」の部份を繁体字にした。

152. 多加良曰答喀喇 [tak'ara] ↔ [takara]

琉球人名地名字典に「多嘉良 (ab) takara」、沖縄語辞典に「多賀良 takara」とある。資料によって、第二字は「加、嘉、賀」と書く。角川日本地名大辞典によると、「高究帳」に豊見城間切多加良村と見え、「由來記」では小禄間切高良村と見え、康熙43年首里の翁姓6世盛武が多嘉良地頭職に任じられ、昭和26年～現在の字名は高良。

153. 武富曰答度奴 [ta(?)tunu] ↔ [takidun(u)]

琉球人名地名字典に「武富 (a) dakidun (b) taketomi」、沖縄語辞典に「武富 dakiduN」とある。

武富は兼城間切の村である。琉球国志略に「兼城間切、金城とも言い、首里から三十里（十五キロ）の南西にある。属村県は十有り：兼城、座波、照屋（越來間切のある地名と同じ）、嘉数（宜野灣間切、豊見城間切のある地名と同じ）、波平、武富、安波根、絲満、湖平、志茂田。」とある。

154. 絲満曰以獨蠻 [ituman] ↔ [ituman]

琉球人名地名字典に「糸満 (a) ichuman (b) itoman」、沖縄語辞典に「糸満 ʔicumaN」(cu=tʃiu←tu) とある。

155. 志茂田曰十木達 [ʃʌ'muta] ↔ [ʃimutaː]

琉球人名地名字典に「志茂田 (a)shimuntā」(shi=ʃi muntā←muta:) とある。

156. 屋比久曰牙必骨 [iapiku] ↔ [iabiku]

琉球人名地名字典に「屋比久 (ab)iabiku」、沖縄語辞典に「屋比久 'jabiku」とある。

屋比久は佐敷間切の村である。琉球国志略に「佐敷は佐鋪とも言い、首里から二十里（十キロ）の南にある。属村県は八つ有り：佐敷、新里、屋比久、手登根、外間、津波古、與那嶺、小谷。」とある。

157. 手登根曰讀滾 [titukun] ↔ [tidukun]

琉球人名地名字典に「手登根 (a)tidikun (b)tedokon」(do→du)、沖縄語辞典に「手登根 tidikuN」とある。

158. 津波古曰即話奴骨 [tsixuanuku] ↔ [tsiΦanuku]

沖縄語辞典に「津波古 çihwanuku」(çi=tsi hwa=Φa) とある。

159. 小谷曰茶旦 [tʃatan] ↔ [tʃiatan]

琉球人名地名字典に「小谷 (a)ukuku」「北谷 (ab)chatan」(cha=tʃia)、沖縄語辞典に「小谷 ʔukuku」「北谷 cataN」(ca=tʃia) とある。

角川日本地名大辞典に「小谷村 王府時代～明治41年の村名。島尻方、はじめ島添大里間切、のち佐敷間切のうち。」「北谷町 現在の嘉手納町、北谷町に当たり、かつての北谷間切のこと。」とある。琉球譯には「小谷」の地名に間違えて「北谷」の発音を記入した。

160. 敷名曰十及那 [ʃtçina] ↔ [ʃitʃina]

琉球人名地名字典に「敷名 (a)shichina」(shi=ʃi chi=tʃi) とある。

敷名は知念間切の村である。琉球国志略に「知念間切 首里から三十里（十五キロ）の南にある。属村県は十有り：知念、敷名、久手堅、山口、鉢嶺、久高、外間（佐敷間切のある地名と同じ）、知名、安座真、下敷屋。」とある。

161. 鉢嶺曰發及密 [fatçimi] ↔ [Φatʃimi]

琉球人名地名字典に「鉢嶺 (a)hachinmi」、沖縄語辞典に「鉢嶺 haciNmi」(ha=xa←Φa ciNmi=tʃinmi←tʃimi) とある。

162. 具志頭曰骨什及養 [kuʃtçiaŋ] ↔ [guʃitʃian]

琉球人名地名字典に「具志頭 (ab)gushichan」(shi=ʃi chan=tʃian)、沖縄語辞典に「具志頭 gusicaN」(caN=tʃian) とある。

琉球国志略に「具志頭間切、首里から三十里（十五キロ）の南にある。属村県が六つ有り：具志頭、波名城、中座、喜納、新城（宜野湾間切のある地名と同じ）、與座（高嶺間切のある地名と同じ）。」とある。

163. 波名曰話那 [xuana] ↔ [xana]

琉球人名地名字典に「玻名 (a) hana」、沖縄語辞典に「玻名 hana」(ha=xa) とある。

地名用字について、琉球国志略と琉球訳は「玻」と書かなく、「波」としていた。角川日本地名大辞典も「玻名」とする。

164. 麻文仁曰麻不一 [mapui] ↔ [mabui]

琉球人名地名字典に「摩文仁 (a) mabui」、沖縄語辞典に「摩文仁 mabui」。琉球国志略に「麻文仁間切(麻は摩とも書く。)、首里から三十里(十五キロ)の南にある。属村県は五つ有り：麻文仁、米次、石原、松嶺、小渡。」とある。

165. 米次曰古密昔 [kumisi] ↔ [kumisi]

琉球人名地名字典に「米須 (a) kumisi」、沖縄語辞典に「米須 kumişi」(şi=si) とある。

琉球国志略と琉球訳は「須」を「次」に誤った。

166. 真榮平曰麻一打一喇 [maitaila] ↔ [maitaira]

琉球人名地名字典に「真榮平 (b) maedaira」、沖縄語辞典に「真榮平 meedeera」(ee←ai) とある。

真榮平は真壁間切の村である。琉球国志略に「真壁、首里から四十里(二十キロ)の南にある。属村県が七つ有り：真壁、田島、真榮平、絲洲、宇榮城、古波藏(真和志間切のある地名と同じ)、新垣(中城間切、勝連間切のある地名と同じ)、名城。」とある。

167. 東邊名曰喀許拿 [tsik'axyna] ↔ [tsikaΦina]

琉球人名地名字典に「東辺名 (a) tsikafina)、沖縄語辞典に「東辺名 çikahwina」(çi=tsi hwi=Φi) とある。

東辺名は喜屋武間切の村である。琉球国志略に「喜屋武間切は首里から四十里(二十キロ)の南に、国の一番南の沿海地にある。属村県が五つ有り：喜屋武(南風原間切のある地名と同じ)、上里、福地、山城(美里間切のある地名と同じ)、東邊名。」とある。

168. 宜野座曰日奴雜 [zɿnutsa] ↔ [dʒinudza]

琉球人名地名字典に「宜野座 (a) jinuza」、沖縄語辞典に「宜野坐 zinuza」(zi=dʒi ʒa=dza) とある。宜野座は金武間切の属村である。琉球国志略に「金武は首里から九十里(四十五キロ)の北東にある。属村県が五つ有り：金武、宜野座、奥松、漠那、祖慶。」とある。

169. 奥松曰午古麻即 [ukumatsi] ↔ [ukumatsi]

角川日本地名大辞典に「おくまつむら 奥松村。王府時代の村名。国頭方金武間切のうち。村名は「中山伝信録」「琉球国志略」に見えるが、比定地未詳。」とある。

170. 名護曰那古 [naku] ↔ [nagu]

琉球人名地名字典に「名護 (a)nagu」、沖縄語辞典に「名護間切 nagu」とある。

琉球国志略に「名護間切は首里から百五十里（七十五キロ）の北にある。属村県が九つ有り：名護、屋部、世富慶、安和、喜瀬、幸喜、松堂、許田、宮里（美里間切のある地名と同じ。）である。

171. 屋部曰牙不 [iapu] ↔ [iabu]

琉球人名地名字典に「屋部 (ab)yabu」、沖縄語辞典に「屋部 'jabu」(ja=ia) とある。

172. 喜瀬曰及石 [tçisʌ] ↔ [tʃiʃi]

琉球人名地名字典に「喜瀬 (a)chisi」、沖縄語辞典に「喜瀬 cisi」(ci=tʃi si=ʃi) とある。

173. 松堂曰麻即多 [matsituo] ↔ [matsido:]

琉球人名地名字典に「松堂 (a)matsidō」(dō=do:) とある。

174. 宮里曰米牙撒獨 [miiasatu] ↔ [miiɑ: dzatu]

琉球人名地名字典に「宮里 (a)myāzatu」、沖縄語辞典に「宮里 mjaazatu」(mjaa=mia: ʒa=dza) とある。

175. 伊指川曰一撒石喀 [isaʃk'a] ↔ [isafika:]

琉球人名地名字典に「伊差川 (b)isashikawa」、沖縄語辞典に「伊差川 ?izasica」(za=dza si=ʃi ca=ka) とある。

角川日本地名大辞典によると、「由來記」に「伊指川」が見え、今は「伊差川」となった。

伊指川は羽地間切の村である。琉球国志略に「羽地間切は首里から百七十里（八十五キロ）の北にある。属村県は六つ有り：池城、屋嘉、伊指川、真喜屋、源河、謝敷。」とある。

176. 親泊曰武牙獨麻里 [uiatumali] ↔ [uiadumari]

琉球人名地名字典に「親泊 (a)'wēduwai (b)oyadomari」、沖縄語辞典に「親泊 ?weedumai」('wee←uia←uoia mai←mari) とある。

親泊は今歸仁間切の村である。琉球国志略に「今歸仁は首里から二百里（百キロ）の北にある。属村県が十二有り：今歸仁、親泊、謝名（宜野湾間切にある地名と同じ）、中城（中城間切と同名）、運天（上運天とも言う）、崎山（首里にある地名と同じ）、玉城（玉城間切と同名）、平敷、仲宗根、呉我、天底、我部。」とある。

177. 天底曰阿眉蘇古 [ameisuku] ↔ [amisuku]

琉球人名地名字典に「天底 (a)amisuku」、沖縄語辞典に「天底 ?amisuku」とある。

178. 浦崎曰午喇撒及 [ulasatçi] ↔ [urasatçi]

琉球人名地名字典に「浦崎 (a)urasachi」、沖縄語辞典に「浦崎 ?urasaci」(ci=tfi) とある。

浦崎は本部間切の村である。琉球国志略に「本部間切は首里から三百里（百五十キロ）の北にあり、南風原間切のある地名と同じである。属村県が七つ有り：伊野波、浦崎、渡久知、崎濱、瀬底、伊豆味、謝花。」とある。

179. 伊豆味曰一足米 [itsumi] ↔ [idzumi]

琉球人名地名字典に「伊豆味 (ab)izumi」、沖縄語辞典に「伊豆味 ?izumi」(zu=dzu) とある。

180. 根路銘曰你禄米 [nilumi] ↔ [nirumi]

琉球人名地名字典に「根路銘 (a)nirumi」、沖縄語辞典に「根路銘 nirumi」とある。

根路銘は大宜味間切の村である。琉球国志略に「大宜味は首里から三百里（百五十キロ）の北東にある。属村県は五つ有り：屋嘉北、喜如嘉、田湊、根路銘、津波。」とある。

181. 濱島曰八麻 [pama] ↔ [bama]

琉球人名地名字典に「濱 (a)hama bama」、沖縄語辞典に「浜 hama」(ha←ba) とある。

中山伝信録には琉球三十六属島が記された。その「東四島」の中に、浜が有る。原文は「巴麻 (pama) は濱島と訳し、南北二島が有り、中山から三十五里（十七・五キロ）の東にある。」

182. 渡名喜曰度奴奇 [tunutçi] ↔ [tunatçi]

沖縄語辞典に「渡名喜（島の名） tunaci」(ci=tfi) とある。

中山伝信録三十六島の「西北五島」に、「度那奇 (tunatçi) 山、渡名喜島と訳し、姑米山に近い。山に牛が多い。」と記されている。

183. 粟國曰阿古宜 [akuni] ↔ [aguni]

琉球人名地名字典に「粟国 (ab)aguni」、沖縄語辞典に「粟国 ?aguni」とある。

中山伝信録の「西北五島」に「安根呢 [ankenni]、阿姑尼 [akuni] とも言い、粟国島と訳し、また安護仁も訳す。度那奇とともに姑米山に近く、言葉も似ている。」とある。

184. 良良部曰一喇不 [ilapu] ↔ [irabu]

良良部は伊良部の誤り。琉球人名地名字典に「伊良部 (ab)irabu」、沖縄語辞典に「伊良部 ?irabu」とある。「琉球訳」北京図書館本の「良」は誤字で、台湾本は「永」と書く。



中山伝信録の「東北八島」に「永良部は伊蘭埠 (ilanbu) に間違っていた。国の五百五十里 (二百七十五キロ) の東北にある。」とある。

185. 徳島曰度古 [tuku] ↔ [tuku]

沖縄語辞典に「徳之島 tukunusima」とある。中山伝信録の「東北八島」に「度姑 [tuku]、徳島と訳す。土音で徳を度、姑二つの音と発音する。国の六百里 (三百キロ) の北東にある。」とある。

186. 由呂曰由六 [iuliu] ↔ [iuru]

由呂は与路のこと。琉球人名地名字典に「与路 yoro」(yo→iu ro→ru) とある。中山伝信録の「東北八島」に「由呂、由路とも書く。度姑から三十八里 (十九キロ) の東北にある」とある。由路、由呂は奄美諸島の与路島である。

187. 烏奇奴曰于及奴加 [ytçinutçia] ↔ [utçinu]

烏奇奴は浮野島のこと。中山伝信録の「東北八島」に「烏奇奴 [utçinu] はまた浮野と言う。度姑から四十里 (二十キロ) の北東にある。」とある。

第四対音字の「加」は次の項目から混入した字だと考えられる。

188. (加) 喜路間曰佳奇呂麻 [kiakiliuma] ↔ [kikiruma]

加喜路間は加計呂麻島のこと。琉球人名地名字典に「加計呂麻 kakeroma」、沖縄語辞典に「加計呂麻島 kikiruma」とある。

中山伝信録の「東北八島」に「佳奇呂麻の呂が路とも書き、又加喜呂麻 [kiakiliuma] と書く。国の771里 (385.5キロ) の北東にある。」とある。

189. 伊喜間曰一及麻 [itçima] ↔ [itçima]

伊喜間は池間である。琉球人名地名字典に「池間 (a) ichima」、沖縄語辞典に「池間 (島の名) ?icima (ci=tçi) とある。

中山伝信録の「南七島」に「伊奇麻 [itçima] は伊喜間と訳し、伊計間も書く。太平山、即ち宮古の東南にある。」とある。

190. 太良末曰答喇麻 [talama] ↔ [tarama]

太良間は実際に多良間のこと。琉球人名地名字典に「多良間 tarama」、沖縄語辞典に「多良間 tarama」とある。

中山伝信録「南七島」に「達喇麻 (tatama)」は太良末とも書く。宮古の西にある。」とある。

191. 字間味曰午喀米 [uk'ami] ↔ [ukami]

ここの字間味は実際に大神を指す。琉球人名地名字典に「大神 (b) okami」、沖縄語辞典に「大神 ?ugaN (gaN←gami) とある。

中山伝信録の「南七島」に「烏噶彌 [ukami] は、字間味とも言う。宮古の西北にある。」とある。

192. 與那国曰由那姑尼 [iunakuni] ↔ [iunaguni]

琉球人名地名字典に「与那国 yonaguni」、沖縄語辞典に「与那国島 'junaguni」とある。

中山伝信録の「南西九島（八重山）」に「由那姑呢 [iunakuni]、與那国と訳す。八重山の西南にある。」とある。

193. 武富曰達奇度奴 [takitunu] ↔ [dakidun(u)]

ここの武富は実際に竹富を指す。琉球人名地名字典に「竹富 (a)dakidun」、沖縄語辞典に「竹富島 dakiduN」とある。

中山伝信録の「西南九島（八重山）」に「達奇度奴は富武と訳し、又は武富と書く。八重山の西、姑弥（西表島）の東にある。」とある。

194. 久高曰姑答喀 [kutak'a] ↔ [kudaka]

琉球人名地名字典に「久高 (ab)kudaka」、沖縄語辞典に「久高 kudaka」とある。

中山伝信録の「東四島」に「姑達佳 [kutaka] は久高と訳し、中山の東の一百四十五里（72.5キロ）の所にある。」とある。

195. 津堅曰奇奴 [(?)kinu] ↔ [tsikin(u)]

琉球人名地名字典に「津堅 (a)tsikin」、沖縄語辞典に「津堅 çikiN」(çi=tsi)とある。

中山伝信録の「東四島」に「津奇奴は津堅と訳し、中山から三十五里（17.5キロ）の東にある。」とある。

196. 久里島曰姑呂世麻 [kulyş̣ma] ↔ [kuruş̣ima]

久里島は実際に黒島を指す。琉球人名地名字典に「黒島 (ab)kurushima」(shi=f̣i)、沖縄語辞典に「黒島 kurusima」(si=f̣i)とある。

中山伝信録の「西南九島」に「姑呂世麻は久里島と訳し、八重山の西、やや北にある。」とある。

197. 波照間曰巴梯呂麻 [pat'ilyma] ↔ [batiruma]

琉球人名地名字典に「波照間 (a)hatiruma」、沖縄語辞典に「波照間 hatiruma」(ha←ba)とある。

中山伝信録の「西南九島」に「巴梯呂麻は波照間と訳し、八重山の一番北西にある。」とある。

198. 宮古島曰米牙古石麻 [miiakuş̣ma] ↔ [miakudzima]

琉球人名地名字典に「宮古島 miyakojima」(ko→ku)、沖縄語辞典に「宮古島 mjaakuzima」(zi=ḍzi)とある。

中山伝信録の「南七島」に「太平山は麻姑 [maku] 山とも言い、最初は宮古、後は迷呂 [miku]、今は麻姑と書く。中山の南の二十里（十キロ）の所にある。」とあ

る。

199. 赤尾嶼曰什及必叔 [ʃʌkipiʃu] ↔ [ʃikibiʃiu]

赤尾嶼は大正島のこと。冊封船は經由するため、陳侃「使琉球録」では赤嶼、中山伝信録では赤尾嶼と言う。琉球人名地名字典では赤尾礁と書き、発音は「sekibisho」(se→ʃi sho=ʃio→ʃiu)である。

200. 八頭岳曰牙一即佳 [iaitçi] ↔ [iaidʒi]

琉球国志略に「八頭嶽は高嶺の東北にある。」「高嶺、土名は多嘉嶺で、首里西南の三十里（十五キロ）の所にある。山南王の故城が有り、東北に八頭嶽が有る。」とある。

角川日本地名大辞典に「やえせだけ 八重瀬岳 方言ではエージ (ie: dʒi↔iaidʒi) ダキという。」「中山伝信録」では八頭嶽と見える。」とある。

第四対音字「佳」は次の項目から混入したと考えられる。

201. (佳)楚岳曰喀竹 [k'atʃu] ↔ [katʃiu:]

琉球国志略に「佳楚嶽、今帰仁村にあり、また宇勝嶽の名で、中山に一番高い峰である。」とある。

角川日本地名大辞典に「かつうだけ 嘉津宇岳 方言ではカチュウ (kabʃiu:) タキという。」と見える。

202. 名護岳曰那古 [naku] ↔ [nagu]

琉球国志略に「名護嶽は名護村にある。」とある。角川日本地名大辞典に「なごだけ 名護岳 方言ではナグ (nagu) ダキという。」と見える。

203. 恩納岳曰間那 [uenna] ↔ [unna]

琉球国志略に「恩納嶽は恩納村にある」とある。角川日本地名大辞典に「恩納岳 方言ではウンナ (unna) ダキという。」とある。

204. 崎山曰煞及牙麻 [ʃatʃiiama] ↔ [satʃiiama]

琉球国志略に「崎山は王府継世門の東にあり、中山の竜脈である。」とある。角川日本地名大辞典に「崎山（那覇市） 方言ではサチヤマ (satʃiiama) という。」とある。

205. 升籥山曰叔著 [ʃutʃu] ↔ [ʔ]

琉球国志略に「升籥山は王府の東北にあり、死んだ宮人の家が見える。」とある。

206. 石虎山曰一石都喀 [iʃʌtuk'a] ↔ [iʃitura]

琉球国志略に「石虎山は王府北の赤平村のうち、天慶院が有る。」とある。

石虎山は赤平の虎瀬山のこと。虎瀬山、とらず (toratsu to→tu) やまと読み、「一石都喀」は「石虎」の発音。

207. 讀谷山曰容當 [iugtaŋ] ↔ [iuntan]

- 山ではなく、地名である。沖縄語辞典に「読谷山 juNtan」(iuntan) とある。
208. 波上山曰那米奴武一 [naminuui] ↔ [naminuui]
- 琉球国志略に「波上は辻山の東北にあり、石筍崖とも名く。」波上山は今の那覇市若狭一丁目にある波上宮という神社が所在する丘陵だと考えられる。
209. 鶴頭山曰寡古多 [kuakutuo] ↔ [kakudo:]
- 琉球国志略に「鶴頂山は奥山（奥武山）の東にある。」中山伝信録は「(奥武山)の東に小さな岡は鶴頭山と言う。」とある。「寡古多」は「鶴頭」の音読「kakudo:」だと考えられる。
210. 雪崎山曰由及奴煞及 [iutçinuşatçi] ↔ [iutfinusatji]
- 琉球国志略に「雪崎山は辻山の北東にあり、海の砂原に近い。」とある。角川日本地名大辞典に「雪崎 那覇市北西部にあった岬。方言ではユーチヌサチ (iutfinusatji) という。」とある。
211. 馬齒山曰八石 [paʃl] ↔ [baʃi]
- 琉球国志略の「西三島」に「東馬齒山は国の西、一百三十里（65キロ）の所にある。五つの島がある。夏録に俗は「溪頼末（kilaima 慶良間の訳音）と言う。所属の間切は渡嘉敷（豊見城間切のある地名と同じ）一つだけである。」「西馬齒山に大小四島が有る。間切一つ：座間味。」とある。角川日本地名大辞典に「ばし (baʃi) ざん馬齒山」とある。馬齒山は慶良間諸島の島島の総称。
212. 姑米山曰古密 [kumi] ↔ [kumi]
- 琉球人名地名字典に「久米 (a)kumi」、沖縄語辞典に「久米島 kumizima」とある。
- 姑米 (kumi) は陳侃《使琉球録》、蕭崇業《使琉球録》、汪揖《使琉球雜録》にそれぞれに古米 (kumi)、粘米 (kumi)、枯米 (k'umi) と書き、皆な「久米」を指す。中山伝信録に「姑米山は馬齒山の西に有り、中山から四百八十里（240キロ）ある。」琉球国志略に「姑米山は久米島と訳す。」とある。
213. 葉壁山曰許牙 [xyia] ↔ [ixia]
- 琉球国志略に「葉壁山は土名が伊平屋島で、中山の北西三百里（150キロ）の所にある」とある。葉壁は [iepia] と発音、伊平屋の音訳である。
- 琉球人名地名字典に「伊平屋 (a)ihya」(hy=xi)、沖縄語辞典に「伊平屋 ?ihja」(hj=xi) とある。
214. 硫磺山曰由我 [iuuo] ↔ [iuo:]
- 琉球国志略に「硫磺山はまた黒島という名で、島が多いので、島島とも言う。国の西北三百五十里（175キロ）の所にある。」とある。
- 沖縄語辞典に「琉黄島 'juoogasima」(juoo=iuo:) とある。

215. 七里山曰石及世 [sɭtɕisɭ] ↔ [ʃitʃiʃi:]

七里山は七星山の誤りだと考えられる。琉球国志略に「七星山は牧志村の長虹堤の南にある」、角川日本地名大辞典に「牧志 域内には冊封使の記録したたえられた七星山が有り、七ツ墓が残っている。」とある。

発音も「七星」で星は [se:] から [si:] へ、最終に [ʃi:] となることが考えられる。

216. 壺家山曰即不牙 [tɕipuia] ↔ [tʃibuia]

琉球国志略に「壺家山は城東にあり、国の制陶所。」とある。

沖縄語辞典に「壺屋 ɕibuja」(ɕi=tsi→tʃi) とある。角川日本地名大辞典に「壺屋 方言ではチブヤという。」(チブヤ=tʃibuia) とある。

217. 八重山曰牙一麻 [iaima] ↔ [iaima]

沖縄語辞典に「八重山群島 'eema」(ee←yae) とある。角川日本地名大辞典に「八重山 方言ではヤイマという。」(ヤイマ=iaima) とある。

218. 重島曰拿喀石麻 [nak'aʃma] ↔ [nakafima]

琉球国志略に「中島は泉崎の南にあり、奥山に隔て相對する」とある。角川日本地名大辞典に「仲島の大石 那覇市中央部泉崎一丁目にある琉球石灰岩の巨石。方言ではナカシマヌウフィシという。」(ナカシマ nakafima) とある。中山伝信録には「仲島」と書く。汪楫《使琉球雜録》に「城の左には那合深麻と言ひ、何の意味かを分らない。」(那合深麻 naxasenma) とある。

琉球訳にの「重」は「仲、中」の同音字で、そのせいで書き変えたかもしれない。そのほか、李鼎元《使琉球録》に「礁有りて孤立す。高さ二丈、囲五尺ばかり、重畳たる上に、小樹、石頂に攢る」とあり、「重畳」だから、「重島」と書いた可能性もある。

219. 石火山曰石及寡 [sɭtɕikua] ↔ [ʃitʃikua]

琉球国志略に「石火山は豊見城饒波村の山下にあり、ある川は東北に流れる。」とある。「石及寡」は「石火」の発音である。

220. 国吉山曰古宜古 [kuniku] ↔ [kuniʃi]

琉球国志略に「国吉山は高嶺の東南にある。」「高嶺は土名が多嘉嶺で、首里西南の三十里（15キロ）にある。」とある。角川日本地名大辞典に「国吉 方言ではクニシという。沖縄本島南部、与座岳西方の石灰岩丘陵の南斜面に立地する。」とある。クニシは kuniʃi と読み、琉球人名地名字典、沖縄語辞典にも「kunishi」(shi=ʃi)、「kunisi」(si=ʃi) と発音する。

対音字の第三字は「ʃi」の音に合わなく、その「古 ku」は「石 sɭ」の誤字だと考えられる。

221. 櫻島山曰我多 [uotuo] ↔ [o: do:]

琉球国志略に「櫻島山は麻文仁村のうち、山の形は櫻に似ているため、名づけられた」とある。「我多」は「櫻島」の音読。

222. 金城山曰今 [tçin] ↔ [tjin]

琉球人名地名字典に「金武 (a) chin」(chin=tjin)、沖縄語辞典に「金武 ciN」(ciN=tjin) とある。「金城山」は「金武山」の誤りで、琉球国志略にも「金武山は首里東北九十里(45キロ)の所にある」とある。

223. 運天山曰文頂 [untiq] ↔ [untin]

琉球人名地名字典に「運天 wiuntin」、沖縄語辞典に「上運天 ?wi?uNtin」とある。琉球国志略に「運天山は上運天とも言う。名護山の北にあり、下は運天川は流れ、稲田が多い」とある。

224. 属島山曰叔古多 [sukutuo] ↔ [sukudo:]

山の名ではない。琉球国志略に「属島山 凡ての島は山と言う。既に島名を列し、以下に繰返さない。」とある。「属島山」は「離島の山」の意である。

225. 清水山曰世洗 [sɿsi] ↔ [fisi]

琉球国志略に「清水山、菊花山、永明山は皆な大島にある」とある。「世洗」は「清水」(せいすい=sesui→sisi→fisi)の音読。

226. 菊花山曰及古寡 [tçikukua] ↔ [tjikukua]

「及古寡」は「菊花」(きくか=kikuka→tjikukua)の音読。

227. 永明山曰伊古 [iku] ↔ [i: mi:]

伊古は永明(えいめい=eime:→i: mi:)の音読。古は誤字だと考えられる。

228. 筑山曰及古 [tçiku] ↔ [tjiku]

琉球国志略に「筑山は太平島に有り、甚だしく高い。土名は七姑(tçiku)山。」とある。

229. 走馬嶺曰所八 [suopa] ↔ [so: ba]

「所八」は「走馬」の音読。

230. 廻雁嶺曰怪干 [kuaikan] ↔ [kuaigan]

「怪干」は「廻雁」の音読。

231. 勒馬巖曰禄古八 [lukupa] ↔ [rukuba]

「禄古八」は「勒馬」の音読。琉球国志略に「勒馬巖は王城の西にある」とある。

<謝辞>

この研究にあたり、比嘉実先生からご指導、孫薇研究員からご協力を戴いた。ここに記して感謝の意を表す。